

# 「始まりの夕焼け」

—初稿—

2024/4/30

月三

〈人物表〉

後藤 陽斗 (18) 高校3年生

小笠原 沙久良 (18) 高校3年生

仲間優子 (18) 高校3年生

細川涼介 (18) 高校3年生

〈ログライン〉

高校を卒業し大学に進学する陽斗は、付き合っていた沙久良との関係継続を望んでいたが、別れることになる。

〈ねらい〉

好きなのに離れたくないと言えない心情をえがきたい。

1. 住宅街・道

手をつないで歩いている後藤陽斗（18）と小笠原沙久良（18）の後ろ姿。

沙久良、鼻歌を歌っている。

沙久良「もう、いくつ寝ると」

陽斗「いやお正月は過ぎたから、もう3月だから」

沙久良「ちがう、大学生っていいたかったの」

陽斗「えー、それはそうだけどセンスやばい」

沙久良「やばくない、あ！」

沙久良、公園を指さす。

沙久良「行く？」

陽斗「行こ」

ニコツと笑う沙久良、その手を強く握る陽斗。

沙久良は手を握り返さない。

その横顔を見つめて、さらに強く手を握り締める陽斗。

2.

公園・内

広い公園をゆっくり歩く二人。

陽斗「もう準備終わった？」

沙久良「うん、明日の東京行の切符も買ってある」

陽斗「相変わらず」

沙久良「まかして」

陽斗「俺は一週間後」

沙久良「北海道かあ」

陽斗「こそ」

沙久良「遠いね」

沙久良は静かに空を見上げている。  
その横顔を見つめる陽斗。

陽斗「遠いかな」

沙久良「遠いよ、ねえ」

陽斗「何？」

沙久良「どうしようっか」

陽斗 「いつものラーメン屋行こうよ。俺らの進学祝い」  
沙久良 「そうじゃなくてさ」

沙久良、陽斗の顔を見て立ち止まる。

沙久良 「私たち、これからどうしよっか」

陽斗 「別に、このままでいいんじゃない」

沙久良 「北海道と東京で？」

陽斗 「太古じゃないんだから、なんとでもなるでしょ」

沙久良 「私はさみしいよ。一緒に帰れないし、帰りにラーメンだって食べられない」

陽斗 「夏休みならできるじゃん」

沙久良 「夏まで待たなきゃいけないの？」

陽斗 「……（言葉に詰まる）」

沙久良、歩き始める。

沙久良 「なんだかんだで楽しかったね」

陽斗 「なんだよそれ」

沙久良 「いつもここでアイス食べたね」

陽斗 「沙久良、ラーメン行かね」

沙久良 「明日、朝早いんだ」

陽斗 「今度いつこっち戻ってくるかわかんないじゃん。とりあえずいっところ」

沙久良 「えー」

陽斗 「ほら、いくよ」

沙久良の手を引いて歩く陽斗。

沙久良 「しょうがないなあ、いっとくか」

沙久良は陽斗の手を握り返す。

陽斗は少しだけ微笑み、沙久良の手を引いて歩いていく。

### 3. ラーメン屋・前

行列のできているラーメン屋。

沙久良 「相変わらずすごいね」

陽斗 「時間平気？」

沙久良 「うーん。でもラーメンだしいっちゃうか」

陽斗は微笑む。

そして、沙久良の手をまた握りしめる。

と、ラーメン屋の扉が開いて仲間優子（18）と細

川涼介（18）が出てくる。

沙久良「あー！優子、涼介」

涼介「おいっす」

優子「沙久良！あれ、まだこっちにいるんだ？」

沙久良「出発明日って言ったじゃん」

陽斗「あれ、二人は？」

涼介「俺ら二人とも地元残り組だから」

優子「残り組」

涼介「お前は北海道だっけ」

陽斗「こそ」

涼介「ひえー。まあ。国変わるわけじゃねえしな」

優子「そうだそうだ」

沙久良「国って」

涼介「んで、沙久良は東京だろ？」

沙久良「こそ」

優子「その言い方、陽斗とちようそっくり」

沙久良「え」

涼介「まあ、東京で大学デビューってやつしちゃってくださいよ」

優子「なにそれ」

楽しそうに笑う優子と涼介を見つめる陽斗。

涼介「そんじゃ、またな」

優子「夏休みにまた会おうね」

陽斗「おっす」

沙久良「ばいばーい」

去っていく涼介と優子は手を繋ぐ。

二人の背をみつめる沙久良。

沙久良の横顔を見つめる陽斗。

沙久良「なんかさ、ちょっとさみしくなっちゃったね」

陽斗「そう？」

沙久良「ラーメン、夏までとっところかな」

陽斗「でもあとちょっとだけど」

二人の前に並ぶのは4、5人くらいの行列。

沙久良「帰ろ」  
陽斗「……わかった」

行列から離れていく沙久良の後ろを歩いていく陽斗。  
顔を上げると夕暮れの空。

#### 4. 公園・入り口前（夕）

沙久良が立ち止まり、陽斗も止まる。  
くるりと振り返る沙久良。

沙久良「じゃ。ここで」

陽斗「え？」

沙久良「覚えてない？ここ」

陽斗「いつもきてたから」

沙久良「ちがうって、2年前一緒に帰ってたときにさ、ここで陽斗が付  
き合おうっていったんじゃん」

陽斗「そ……だっけ」

沙久良「そそ」

陽斗「そっか」

沙久良「陽斗」

陽斗「……何？」

沙久良、俯いている。

その顔をじっと見つめる陽斗。

沙久良、ゆっくり顔を上げて陽斗の目を見つめる。

そして、にこりと笑って、

沙久良「いままでありがとう」

陽斗「……」

笑顔の沙久良の後ろに広がる夕焼けの空。

沙久良「約束、守れなくてごめんね」

陽斗「約束？」

沙久良「おじいちゃんとおばあちゃんになっても、ここでアイス食べよ  
うって」

陽斗「……別に他の子と食べるから」

沙久良「えー、わかったよ」

陽斗「沙久良」

沙久良「うん？」

陽斗 「……明日」

沙久良 「そろ。早いんだった」

陽斗 「じゃ、もう帰れば」

沙久良 「冷たいなあ、じゃあ帰る」

陽斗 「わかった」

沙久良 「じゃ」

陽斗、うなづく。

沙久良、微笑む。

そして大きく手を振って去っていく。

陽斗も沙久良に背を向けて去っていく。

目の前に自分の大きな影が伸び得ている。

ふと立ち止まって、後ろを振り返る陽斗。

誰もいない道。

空には大きな夕陽が光っている。

完